中村真一郎著

愛と美と文学

―わが回想―

岩波新書

88

中村真一郎著

愛と美と文学

―わが回想―

岩波新書

88

中村真一郎

1918年東京に生まれる
作家・評論家
著書―「色好みの構造」(岩波新書)
「中村真一郎評論集成」(全5冊，岩波書店)
「四季」(4部作，新潮社)
「江戸漢詩」(岩波書店)
「頼山陽とその時代」(中央公論社) ほか

愛と美と文学　　岩波新書(新赤版) 88

1989年9月20日　第1刷発行 ©

定価520円
(本体505円)

著　者　中村真一郎

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京6-26240

印刷・精興社　製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　Printed in Japan
ISBN 4-00-430088-6

目　次

第一章　幼時の環境……1
1　私の出自
2　ふたつの森町
3　父の家系への誇り
4　伯父の理想主義的生涯
5　母方の家風
6　母の思い出
7　死の連続とその意味
8　最初の社会・幼稚園
9　小学校生活
10　『小公子』と文学的体験

第二章　父の影響……45
1　東京の父の家
2　父の個人主義
3　資本主義と社会主義
4　現実政治との触れ合い
5　国際性と普遍性
6　美への目覚め
7　中学校生活
8　小説家志望
9　第二の母
10　第三の母と父の死

第三章　青春の人格形成……93
1 世間の冷酷さ
2 貧困の意味
3 友情と善意
4 階級の問題
5 平等と革命
6 美による救済
7 神秘的体験
8 人格の統一
9 人文主義
10 愛と官能
第四章　人生の戦い……137
1 戦争の現実
2 戦争と私
3 文学生活
4 大学生活
5 結婚生活
6 芸能生活
7 生活の挫折
8 人格の再建
9 西洋経験
10 魂の解放と色好み

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五章　成熟と老年……183
1　再婚と新生活
2　『四季』四部作
3　収穫期
4　軽井沢
5　イタリアと中国
6　友人の死
7　老年の進行
8　前衛の成熟
9　職業としての文学
10　自伝
あとがき……231

第一章　幼時の環境

母に抱かれて（満1歳，1919年）

1 私の出自

私は長いこと、自分が静岡県森町の生れであると信じていた。本籍もそこにあったからである。そして、文学全集などの巻末の年譜にも、そう記されていた。

というのは、一生、実業家として東京暮しをしていて、私の十六歳の時に世を去った父が、ちょうど母の妊娠中に、事業のために上海に単身で暮していたので、留守を守っていた母が実家の森町に戻って、その母(私の祖母)のもとで私を生み、そのまま出生届がなされたものと私は信じて疑わなかったのだった。

ただ、乳児の私の写真は東京の下町独特の、小さな中庭で若い母に抱かれているものが残っているので、母は私を生んで間もなく、東京の家へ戻ったのだろうと想像していた。

ところが、五十歳になった頃か、私の研究家が驚くべき発見をした。当時、東京日本橋の箱崎町に居を構えていた私の一家では、出産間際まで母はその留守宅に暮していて、いよいよ出産の時期が迫った時、近くの病院に入院した、という事実を、その時病院につきそって

行った、当時わが家の書生をしていた老人を、私の研究家が見出して、直接聞き出したのである。

それ以後、私の年譜は、「大正七年(一九一八)、東京市に生る」と書き変えられることになる。

私は生前の父から、江戸趣味の彼が、関東大震災以前は、下谷練塀町だの浅草三筋町だの借家を転々として、下町生活の情緒を愉しんだということを聞いており、小学、中学時代も蠣殻町だの人形町だの、水天宮、亀戸天神などの散歩によく連れて行かれたので、乳児の頃は帰国した父と母とで東京下町で暮したのだろうと、漠然と思いこんでいた。

しかし、東京に生れたのに、森町に私の本籍があるとなると、森町出身の父の本籍がそこにあったのだから、私の籍も当然そこに編入されたのだろう、と考えることにして、その問題はそれ以上、私を悩ますことはなかった。

ところが、最近になって、突然に思い当ったのだが、私が入学とかパスポートの取得とか、何かの手続きのたびに、従来、取り寄せていた私の戸籍に関する書類の本籍地の記載には、父の生家のある、森町の向天方という地名は見られなかった。しかし庶子でない私が森町の

新町の母方の籍に入れられたということは、いくら、父が外国にいたとしても、大正時代の町役場の戸籍係が、承認するはずはないだろう。そこで、七十歳になった私は、生れてはじめて、中村という自分の姓に関心を抱くに至った。

以前、各家庭の「ルーツ」を探るということが流行したことがあり、その関係の本が盛んに出版されたが、その頃、私は本屋の立読みで、「中村」という項目を覗き、そこに「むずかしい事をやさしく書く東洋哲学者の中村元も、やさしい事をむずかしく書く小説家の中村真一郎も、いずれも遠州中村氏という名流の一族である」と記載されているのに出会って、その古代インド関係の著書から大きな影響も受け、直接、お話もうかがった碩学の中村教授と私とが同族だと指摘されていることに、大変にいい気分になった。何しろその姓に関する書物の著者は、従来から著名な、その方面の学者で、流行に乗じて一夜漬けで安直な本を製造するような、怪しげな文筆家ではなかったのである。

しかし、私の父の生家は山内なのである。そして母の生家は岡野なのである。だから、私の父母は、いわゆる両養子として、同じ森町で、当時、絶えようとしていた中村という家を継いだことになる。

私の微かな記憶の奥に、無闇と広い部屋を持つ古ぼけた料理屋があり、小さなまげを頭に乗せた老婆がその家の女主人なのだが、その人物が、当時まだ生きていた私の曾祖母の姉で、同時に私の両親の養母であり、その料亭が中村屋という看板をかかげていた、という仄暗い光景が浮び上ってくる。

この、七十歳に至るまで、自分の出自に対して無関心であったという事実は、私の性格の特殊性を暗示しているかも知れない。

早くして孤児となり、独立生活を余儀なくされた私は、幼時からの夢想癖に加えて、自分だけの世界に閉じこもるという傾向が強く、その強さが青春の暗黒時代をも、辛うじて生き延びさせることになったのだが、少年時代の終り頃、アンドレ・ジードの『法王庁の抜穴』を読んで、主人公の少年のラフカディオが、自分が自分の先祖である、自分はいかなる家系にも隷属していないと考えているのに大いに共感し、私自身も一生、その態度で貫いて来た。その態度が、母の弟である森町住いの叔父のもとに、若い頃から何度も我が家同然に滞在したにもかかわらず、私の姓の「中村」家の「ルーツ」を実証的に調査することに何の興味もなく、ひたすら私自身の未来の可能性に打ちこんでいたことと関係があろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2　ふたつの森町

記憶の遡れるかぎりは、私は東海道線の袋井から北に入った森町の母方の家に、祖母によって育てられていて、母は既になく、関東大震災後は、事業のために東京と大阪との両方に家を構えた独身の父が、東海道線の上り下りの途中で、年に一度か二度、突然に私の前に現れて、数日の滞在の後また飄然と消えるという印象である。

父は私を自分の兄の、山内の私にとっては伯父の家に伴って、その二人きりの兄弟は仲よく、鮎漁をやったり、酒を酌みかわして、お互いの近況を愉しそうに話し合ったりしていた。しかし私は、父の森町に現れる目的が、その都度、父の冒険的事業のための資金を、兄や一族たちから掻き集めることにあることに気付いていた。

伯父は家を出た、ただ一人の可愛い弟のために、山林を売ったり、田畑を整理したり、親戚を駆けまわったりして金を作り、弟の実業界での成功に夢をかけているようだった。

しかし、後年になって、その伯父は、「おまえのおやじに、おれだけでなく親戚じゅうが裸

にされてしまった。急に金を用意してくれと電報で頼まれて東京まで持って行くと、待合に芸者としけこんでいて、その払いがたまっていたこともあった。その挙句、結局、おまえのおやじは何ひとつ、事業に成功しないままで、死んでしまった」と、何度も愚痴を言った。

一方、母方の私の曾祖父は末弟を養子にし、大勢の内弟子と共に広い仕事場で鋸鍛冶を業とし、全国にその名が聞えていた。そして、後を継いだ祖父が死んだ後も、第二次大戦中まで、遠い九州などから、木こり用の大鋸をぜひ分けてほしいという注文が来るほどだった。

戦後になって、私が阿佐谷に住んでいた頃、散歩の途中で、「中屋豊吉直弟子」の看板を掲げた刃物屋を見掛けた時、私は久し振りに、世間に通っていた曾祖父のこの名前を思い出し、私を溺愛してくれた、恐らく仕事場の炎熱のために頭髪の全く抜け落ちて、つやのいい禿頭でいつも元気に働いていた老人の面影を甦らせたものだった。

ところで、森町のあたりは、戦国時代に今川氏の支配下にあった時、義元が作った神社に京都から神楽団を移住させ、その舞いには、今日、大阪天王寺にしか残っていないものもあり、また、その舞楽面も古い貴重なものであり、さらに氏子団も日本で最も古い形が現在まで続いているとして、民俗学者たちの注目を浴びている。

この神社に今川攻めのために火を掛けた家康は、戦後、直ちに再建したが、その棟梁は日光東照宮と同じ人物である。

江戸時代には、森町は火の神、秋葉神社への参詣のための、いわゆる秋葉街道の宿場町として栄えていた。清水次郎長の子分の森の石松の出身地ということになっているように、宿場町は博徒のたむろするところで、私の曾祖父もいわゆる貸元のひとりとして知られていて、警察署長の交替ごとに、土産を持って挨拶に来たのを、幼い私は見掛けたものである。

しかし、私が学齢に達した時、きっぱりとその世界と縁を切り、私にも一生、骰子(さいころ)を手にしないことを氏神に誓わせ、そして厖大な博打(ばくち)用のトランプの山に火をつけた。私はその中の奇麗な絵札を数枚もらって、しばらくおもちゃにした。

ところで、森町は中央を流れる太田川によって二分され、下流から眺めると、右側は背後に山を背負った農家を主とした村落の向天方であり、橋のたもとに父の生家があり、そこには遊廓などもあった。

一方、左側は町で、江戸時代は江戸と大阪との古着商の交易の場で、白壁の蔵が軒を並べ、江戸弁や大阪弁の番頭が常駐していて、商業の町として栄え、料理屋も多かった。

明治以後は、町役場も小学校も病院も、その他の公共施設はすべてこちら側にあり、明治町とか、母の生家のある新町とかの名から知られるように、近代になって、その平野に町は田畑をつぶして拡がって行ったものと思われる。また、寺院も古くは奈良時代のものから、多くこちら側にある。古代には東海道は浜名湖の北岸を通っていて、だから、業平も東下りの途中、このあたりを通ったはずだし、平安初期の三筆のひとり、橘逸勢（たちばなのはやなり）も流罪の旅でこの近くで死に、墓が今に存するはずである。

そして江戸時代は、右側の村は幕府の直轄領（天領）であり、左側の町は旗本土屋氏の領地であった。

旧山内氏の支配した天領側の天方（あまがた）村の農民は、江戸初期以来の幕府の厚遇により、おのずから誇り高い独立の気風を存し、旅行に際しても農民ながら将軍家の直臣をもって任じ、「お百姓」と称して、旅館に泊るにも、一般の農民よりは一段高い場所に席を占めるのが常だったと、かつて何かの随筆書で読んで驚いたことがある。私の父方の伯父などには、確かにそうした気風が見られた。

一方、旗本土屋氏の江戸の邸は、本所松坂町の高家吉良氏の邸に隣接しており、例の赤穂

浪士の吉良邸への討入りの夜の光景、その翌日の幕吏の取調べの詳細などが、土屋家の当直の執事の勤向日記に生なましく記されて、今日まで残っている。森町の領地から、四人の執事が二人ずつ交替で、江戸屋敷へ詰めていたのである。

3　父の家系への誇り

私の中学時代に世を去った父は、後に述べるように、私の人格形成に決定的な影響を与えたが、封建的貴族的感情と近代市民精神との極端な対立を、矛盾としてでなく調和として生きた、近代日本独特の人物だった。

父は時々、郷里の森町に帰り、向天方の兄の家で、嬉しそうに酒を酌み交す時、必ず自分たちが、今は廃墟となった天方城の城主の直系の子孫であることを誇りとして語った。

天方城は戦国時代、太田川を見下す崖のうえにあり、城主は山内山城守通綱で、その兄はさらに秋葉街道を東海道寄りに下った隣りの城、飯田城の城主だった。

そして武田氏が海を求めて遠州に攻め入る時、最初に出会うのがこの天方城で、山内一族は当時の小城主の常として、今川氏に属したり、武田氏に仕えたりして、生き残りを工夫したらしい。

武田氏が高天神城（たかてんじん）攻めのために、秋葉街道を攻め下って来た時、武田氏の大軍に最初に攻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com